

幼児と環境との望ましい関係を求める試み (2)

A Survey on the Desirable Relationship between Children and Environments (2)

森 久子 石塚 盈代
MORI Hisako and ISHIZUKA Mitsuyo

はじめに

新学習指導要領¹⁾に基づいて公教育としての「環境教育」が試行されるようになってきた。

環境問題は、身近なことから地球的規模の問題までさまざまであるが、前者については、日常生活の具体的な場面でどう対処するかという行動様式や社会的ルールを学習しつつある幼児期から、環境への配慮を意識した教育が行なわれることが望ましいと筆者らは考えているが、具体的な取組みはまだほとんどなされておらず²⁾、研究者による報告も数例にとどまっている³⁾。

環境教育の目的である、環境への主体的な関わり方や行動の仕方を身につけるためには、幼児期から小・中・高・成人に至る生涯教育として位置づけられる必要があると考えている。

I. 目的

幼児期の環境教育カリキュラムの構築を目指

すための第1段として、日常生活場面で幼児に影響力をもつと考えられる母親と女性保育者の双方を対象に質問紙調査（平成11）⁴⁾を行い、具体的な生活の各場面における行動の判断を通しての子どもへの意識づけと、双方の回答者自身の市民としての意識との実態を把握した。

今回はその続報として、調査項目のクロス集計や自由記述等の結果の分析を試みる。

II. 方法

1. 前回の調査では保育者対象のサンプル数が7カ所と少なかったため、新たに32カ所を抽出し、計39カ所を県内の4ブロックに均等になるようにして、前回と同一の質問紙調査を実施（平成12.1）し、結果を得点化する。
2. 保護者および保育者の行動特性を知るためのクロス集計を行なう。
3. 保育者の自由記述から、幼児を対象とする環境教育のための教材化へのヒントを探る。

もり ひさこ（幼児教育学科） いしづか みつよ（食物栄養学科）

(保育者向け)

Ⅲ. 結果と考察

1. 前回の調査結果からわかったこと

(1) 幼児の生活モデルとしての保護者の実態

①空缶やごみを捨てない・物やおもちゃを大切に扱う・水を出しっ放しにしない・食物を残さない等は、具体的な場面での生活指導として躡けている。

②身近な自然とのかかわりをもたせようとする姿勢があまり見られない。

③子どものこぼした物を拭く場合や公衆トイレを使用させた後に手を拭く場合に用いるもの等に、30代女性の意識が反映されている。

(2) 幼児の生活モデルとしての保育者の実態

①おもちゃや物を大切に扱うこと・外出先で出したごみを持ち帰ること・食物を残さないこと・気温に応じて衣服の調節をすること等は非常に意識して指導されている。

②自然との関わりに関しては意識的な取り組みがなされている。

(3) 幼児の生活モデルとしての保護者と保育者の実態

子どもとの関わりに関しては、保育者の方がより意識的な回答が多いが、節電・ごみの分別・ポイ捨ての指導に関しては保護者の方が意識が高い。

(4) 市民としての保護者と保育者

①回答者自身のことを問う設問に対しては、両者間の差は少ない。

②身近な自然への関心・廃材の再利用・材質の安全性への配慮等は、保育職の専門性との関わりが強い内容であることもあり、保育者の意識の方が有意に高い値を示した。

2. 今回の調査の結果と考察

(1) アンケート依頼先および配布・回収状況

依頼・・・平成11年8・9月、平成12年1月					
(地区)	砺波	高岡	富山	新川	計
幼稚園	3		4		7
保育所	7	10	6	9	32
計(カ所)	10	10	10	9	39

回収・・・平成11年9月、平成12年2月				
	幼稚園	保育所	計(人)	回収率(%)
保護者	71/74	285/332	356/406	87.7
保育者	19/19	111/112	130/131	99.2

(2) 回答者の状況

表1に示すとおり回答保護者の96%は母親であり、うち30代が母親全体の過半数(69%)を占めている(30代前半45%、後半24%)。

表1 回答保護者の年齢層別人数と割合

年齢	母親	(%)	父親	無記入	計(人)
20～24	4	1.2			4
25～29	62	18.1	1		63
30～34	154	45.0			154
35～39	83	24.3	4		87
40～	32	9.4	4		36
無記入	7	2.0	1	4	12
計 人	342	(100)	10	4	356
%	96.1		2.8	1.1	100.0

表2 回答保護者(女性)の勤務年別人数

勤務年数	幼稚園	保育所	計(人)	%
5 年 未 満	5	14	19	14.6
5～10年未満	2	14	16	12.3
10～20年未満	4	18	22	16.9
20 年 以 上	7	62	69	53.1
無 記 入	1	3	4	3.1
計 人	19	111	130	
%	14.6	85.4		100.0

回答保育者の勤務年数別人数は、表2に示すように、勤務経験が20年以上のベテランが過半数（69名53%）を占めていた。

(3) 各設問への平均回答値

子どもとのかかわりを問う質問項目および、回答者自身への質問項目を、それぞれ保護者向けと保育者向けの内容毎に対応させた。

択一式の設問については「あまり配慮していない」から「非常に配慮している」までの各回

表3 子どもとのかかわりを問う設問と両者の平均回答値（両者間に有意差が認められる項目のみについて）

（※：設問内容区分毎の両者間の共通項目数を示す）

設問内容区分 (全 ※問)	保護者 (N=356)	保育者 (N=130)	備 考 (*P<0.05)
I. 自然とのかかわり (全 5問)	問1 1.8	問1 2.4	*
	問2 1.8	問2 2.3	*
	問3 1.8	問3 2.4	*
	問5 1.9	問7 2.2	*
II. 省エネルギー (全 4問)	問6 1.7	問9 1.9	*
	問7 2.2	問10 1.9	*
	問11 2.1	問12 2.7	*
III. 水・空気 (全 3問)	問12 2.4	問14 2.6	*
IV. 食 (全 3問)	問15 1.8	問19 2.3	*
	問16 2.3	問20 2.7	*
	問18 1.2	問22 1.5	*
V. ごみとリサイクル (全 7問)	問20 1.6	問24 1.9	*
	問21 2.4	問25 2.9	*
	問23 1.9	問26 1.5	*
	問24 2.7	問28 2.4	*
	問25 2.1	問29 2.9	*
	問26 2.3	問37 2.9	*

答を1・2・3と得点化し、保護者と保育者の両者間に有意差（5%）の認められた項目についてのみ、その平均回答値を示したものが、表3および表4である。

保育者のサンプル数を増やしたことにより、回答平均値は前回の結果に比べ、±0.1程度の増減があった。（その結果新たに有意差が生じた場合は備考欄に*で示した）

表3および表4から、大人自身の意識が子ど

表4 回答者自身のことを問う設問と両者の平均回答値（両者間に有意差が認められる項目のみについて）

（※：設問内容区分毎の両者間の共通項目数を示す）

設問内容区分 (全 ※問)	保護者 (N=356)	保育者 (N=130)	備 考 (* P<0.05)
I. 自然とのかかわり (全 2問)	問27 2.0	問39 2.4	*
			うち1問は自由記述
II. 省エネルギー (全 2問)	問31 1.1	問13 1.0	*
	問32 1.3	問42 1.5	*
III. 水・空気 (全 2問)	—	—	うち1問は自由記述
IV. 食 (全 2問)	問36 2.3	問18 2.6	*
	問38 2.0	問21 2.3	*
V. ごみとリサイクル (全 7問)	問40 1.9	問27 2.1	*
	問42 2.6	問31 2.3	*
	問44 2.0	問33 1.4	*
	問48 1.8	問30 2.7	*
	問49 2.0	問36 2.7	*
	問50 2.4	問45 2.6	*
合 計	51問	46問	表3および表4の全問

もへのかかわりにどのように影響しているのかを調べるためにクロス集計を試みた。

3. 保護者および保育者の行動特性

(クロス集計結果)

(1) 自然とのかかわりに関して

大人自身の自然への関心の有無によって、子どもが自然に関わることへの配慮に相違がある

表5 大人自身の自然への関心の有無

選 択 肢	保護者向け(問27) %		保育者向け(問39) %	
3 関心がある	89	25.0	55	42.3
1 あまり関心がない	82	23.0	6	4.6
2 どちらかといえば関心がある	180	50.6	67	51.5
NA	5	1.4	2	1.5
計	356	100.0	130	100.0

かどうかを見る。

表5より、保護者自身の身近な自然や動植物への関心の有無(問27)は、ほぼ同数(25.0%, 23.0%)であるが、子どもとの関わりにおいては、親の関心の有無によって差があることがわかった。(図1-1および図1-2)

図1-1より、保護者自身が身近な自然や動植物に関心があると、子どもとの関わりにおいても自然と接することに配慮しているか、どちらかといえば配慮しているという割合が高い(平均31.5%, 50.6%)。

自然に関心がある保護者が、子どもとの関わりで特に配慮しているのは「親子で小動物や植物の飼育や世話をする事」(問5・41.6%)と、「野外へ出かけて小鳥・小動物や昆虫を探すこと」(問3・36.0%)である。

図1-1 自然に関心がある保護者(問27)×子どもが自然と関わることへの配慮

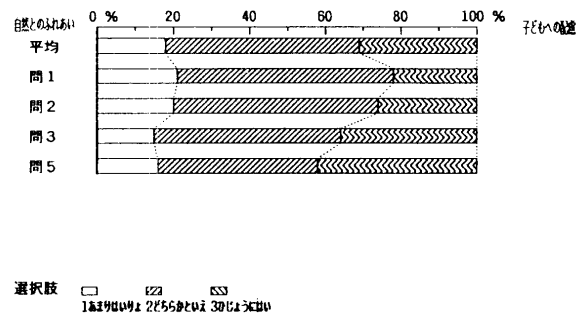


図1-2 自然に関心がない保護者(問27)×子どもが自然と関わることへの配慮

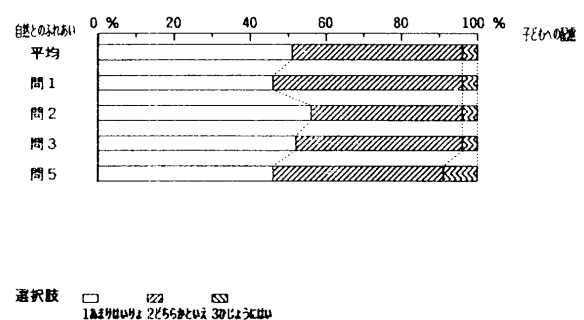


図2 自然に関心がある保育者(問39)×子どもが自然と関わることへの配慮

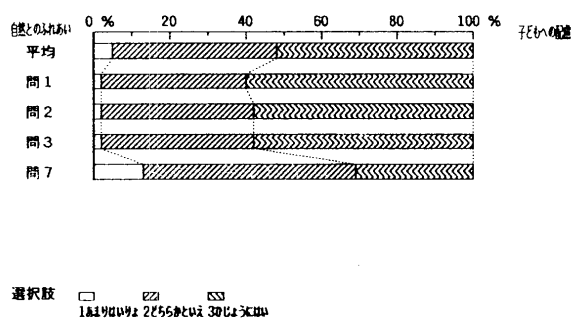


図1-2より、保護者自身が身近な自然や動植物に関心がないと、子どもとの関わりにおいても、自然と接することに配慮していないとする回答が、半数(平均50.0%)を占める。

自然に関心がない保護者が、子どもとの関わりでありあまり配慮していないと答えているのは、特に「親子で野草や雑草を眺めたり生けたりすること」（問2・54.9％）と、「野外へ出かけて小鳥・小動物や昆虫を探すこと」（問3・52.4％）である。

表5および図2より、保育者自身の自然への関心は高い。また自然への関心がある保育者は、子どもと自然との関わりにおいても非常に配慮しているとの回答率が高い（平均51.8％）。

(2) 食に関して

① 旬の食物について

大人自身が旬の食材を味わうようにしているかどうかによって、子どもに旬の食物を教

表6 大人自身の旬の食材への関心の有無

選 択 肢	保護者向け(問36) %		保育者向け(問18) %	
3 関心がある	149	41.9	86	66.2
1 あまり関心がない	30	8.4	8	6.2
2 どちらかといえば関心がある	177	49.7	34	26.2
NA	0	0	2	1.5
計	356	100.0	130	100.0

えることに相違があるかどうかを調べる。

表6より、大多数の保護者は旬の食材を味わうようにしている（関心がある41.9％、どちらかといえば関心がある49.7％）。

図3-1より、自身が旬の食材を味わうことに関心があると答えた保護者は、子どもにも旬の食物を教えている（非常に配慮している29.5％、どちらかといえば配慮している55.0％）。また自身が旬の食材を味わうことにあまり関心がないと答えた保護者は、子どもに

図3-1 保護者自身の旬の食材への関心の有無(問36) × 子どもに旬の食物を教えること(問15)

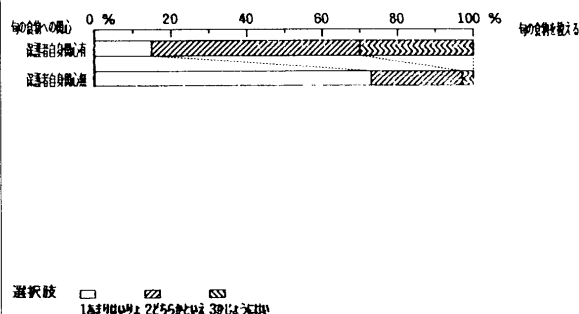
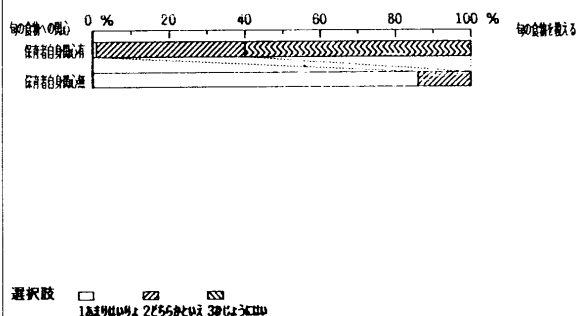


図3-2 保育者自身の旬の食材への関心の有無(問18) × 子どもに旬の食物を教えること(問19)



教えることにあまり配慮していない（73.3％）。

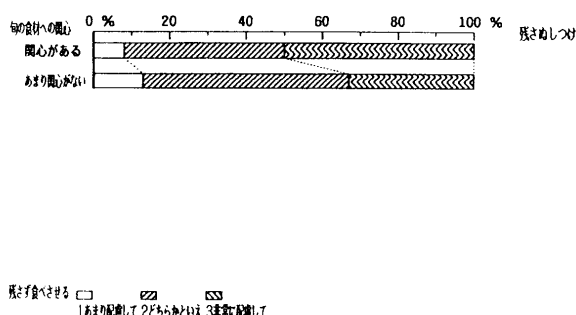
表6および図3-2より、自分自身が旬の食材を味わうことに関心があると答えた保育者は過半数（66.2％）で、これらのほとんどすべての人が、子どもに旬の食物を教えることに配慮していると言える（非常に配慮している60.5％、どちらかといえば配慮している38.4％）。

② 旬の食物と残さず食べさせるしつけ

旬の食材を味わうようにしている保護者（149名）とそうでない保護者（30名）とで、子どもに残さず食べるように躾けること（問16）との関連を調べる。

図4より、子どもに残さず食べるようにし

図4 保護者自身の旬の食材への関心の有無(問36)×
子どもに残さず食べさせるしつけ(問16)



つけることと、保護者が旬の食材を味わうようにしていることとは関連は薄く、いずれの保護者も子どもには残さず食べるようしつけをしているといえる。

③旬の食物を教えることと子どもの年齢

表7 子どもに旬の食物を教えること(問15)

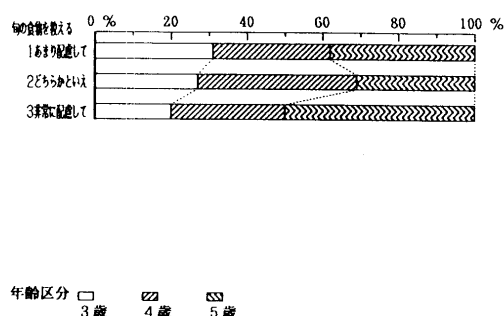
選 択 肢	保護者(数)	(%)
3 非常に配慮している	50	14.0
1 あまり配慮していない	107	30.1
2 どちらかといえば配慮	198	55.6
NA	1	0.3
計	356	100.0

子どもに旬の食物を教えること(問15)と、子どもの年齢との関係の有無を調べる。

表7より、子どもに旬の食物を教えることについては、3割の保護者は「あまり配慮していない」と回答している。

また図5より、子どもに旬の食物を教えることについては「非常に配慮している」という回答が子どもの年齢と共に漸増している。

図5 旬の食物を教えること(問15)×
子どもの年齢

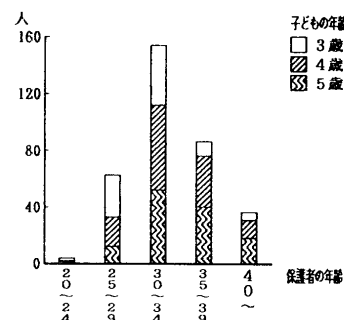


子どもに旬の食物を教えることについてあまり配慮していない保護者は、子どもの年齢に関わらず、どの年齢にも3割前後見受けられる。

④旬の食物を教えることと親の年齢

子どもに旬の食物を教えることと、保護者の年齢に関係があるかどうかを見る。

図6 保護者の年齢層毎の子どもの年齢別人数



保護者の各年齢層毎の子どもの年齢別人数は、図6に示すとおりである。

表8は、子どもに旬の食物を教えることについてあまり配慮していない保護者の、各年齢層毎の子どもの年齢別人数であるが、30歳台の保護者の割合が、その他の年代よりもやや低い(20%台)。

表8 子どもに旬の食物を教えることにあまり配慮していない保護者と子どもの年齢

(問15で「1 あまり配慮していない」と回答した保護者の年齢と子どもの年齢別人数)

保護者の年齢 子どもの年齢	20～24 人	25～29 人	30～34 人	35～39 人	40～ 人	計	子どもの各年齢毎の 内訳 %
3 歳	1	11	13	4	2	31 32.3	31/ 90=34.4
4 歳	1	5	12	8	3	29 30.2	29/131=22.1
5 歳	0	6	15	9	6	36 37.5	36/123=29.3
計 人	2	22	40	21	11	96	96/344=27.9
%	2.1	22.9	41.7	21.9	11.5	100.0	
保護者の各年齢区分毎 の子どもの割合 %	2/4 50.0	22/63 34.9	40/154 26.0	21/87 24.1	11/36 30.6	96/344 27.9	

表9 子どもに旬の食物を教えることに非常に配慮している保護者と子どもの年齢

(問15で「3 非常に配慮している」と回答した保護者の年齢と子どもの年齢別人数)

保護者の年齢 子どもの年齢	20～24 人	25～29 人	30～34 人	35～39 人	40～ 人	計	子どもの各年齢毎の 内訳 %
3 歳	1	2	3	3	0	9 19.1	9/ 90=10.0
4 歳	0	2	11	2	0	15 31.9	15/131=11.5
5 歳	0	1	12	7	3	23 48.9	23/123=18.7
計 人	1	5	26	21	3	47	47/344=13.7
%	2.1	10.6	55.3	25.5	6.4	100.0	
保護者の各年齢区分毎 の子どもの割合 %	1/4 25.0	5/63 7.9	23/154 16.9	12/87 13.8	3/36 8.3	47/344 13.7	

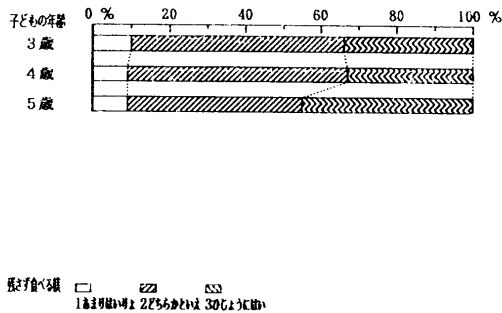
さらに表9より、子どもに旬の食物を教えることに非常に配慮している保護者は全体的に少ないが、30歳台の親はその他の年代の親に比べて同年代中に占める親の割合が高くなっており、子どもの年齢が高くなるに応じて、旬の食物を教えることに配慮している親の割合は高くなっている。

⑤残さず食べさせるしつけと子どもの年齢・保護者の年齢

子どもに残さず食べるようしつけること(問16)と、子どもの年齢・保護者の年齢との関係を見る。

図7より、5歳児の保護者は他の年齢の子の保護者よりも、残さずに食べさせるよう躾

図7 残さず食べさせるしつけへの配慮(問16)×子どもの年齢



けられている5歳児の割合は他の年齢に比べて高く、5歳児の保護者は他の年齢の子の保護者よりも残さず食べるよう躾けている割合が高いと言える。

(3)ごみとリサイクルに関して

①ごみの持ち帰り指導

「外出先で出したごみを持ち帰るよう指導している」(問25)保護者の回答は、あまり配慮していない(22.8%)、非常に配慮している(31.2%)である。

ごみの持ち帰りをしつけている保護者は、

表10-1 残さず食べるようにしつけることと保護者の年齢との関係
(あまり配慮していない保護者)

保護者の年齢 子どもの年齢	20～24 人	25～29 人	30～34 人	35～39 人	40～ 人	計	子どもの各年齢毎の 内訳 %
3 歳	0	2	4	0	2	8 24.2	8/ 90= 8.9
4 歳	0	1	4	4	3	12 36.4	12/131= 9.2
5 歳	0	0	5	4	4	13 39.4	13/123=10.6
計 人	0	3	13	8	9	33	33/344= 9.6
%	0.0	9.1	39.4	24.2	27.3	100.0	
保護者の各年齢区分毎 の子どもの割合 %	0/4	3/63	13/154	8/87	9/36	33/344	9.6

ける割合が高いといえる(非常に配慮している44.9%)。

表10-1より、残さず食べるように躾けることにあまり配慮していない保護者を、年代別に見ると、40代の保護者は、人数は少ないが他の年齢層に比べ、人数の割にはやや多い。子どもの年齢にはあまり関係がなく、各々1割程度である。

表10-2より、残さず食べるように躾けることに非常に配慮している保護者を年代別に見ると、20代後半の保護者の割合が高い。躾

ごみの分別やばい捨ての指導にも関心が高いかどうかを見る。

図8-1より、ごみの持ち帰り指導について、非常に配慮している保護者は、ごみの分別についても8割弱が配慮しているのに対し、ごみの持ち帰り指導にあまり配慮していない保護者の過半数はごみの分別にもあまり配慮していないと回答している(56.8%)。

図8-2より、ごみの持ち帰りの指導に非常に配慮している保護者は、ほとんど全員がばい捨て指導に非常に配慮していると回答し

表10-2 残さず食べるようにしつけることと保護者の年齢との関係
(非常に配慮している保護者)

保護者の年齢 子どもの年齢	20～24 人	25～29 人	30～34 人	35～39 人	40～ 人	計	子どもの各年齢毎の 内訳 %
3 歳	0	13	12	6	0	31 23.5	31/ 90=34.4
4 歳	0	11	21	8	4	44 33.3	44/131=33.6
5 歳	1	8	23	20	5	57 43.2	57/123=46.3
計 人	1	32	56	34	9	132	132/344=38.4
%	0.8	24.2	42.4	25.8	6.8	100.0	
保護者の各年齢区分毎 の子どもの割合 %	1/4 25.4	32/63 50.8	56/154 36.4	34/87 39.1	9/36 25.0	132/344 38.4	

図 8-1 ごみの持ち帰り指導(問25)×
ごみの分別指導(問23)

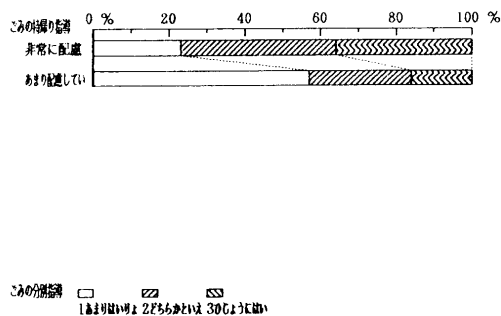
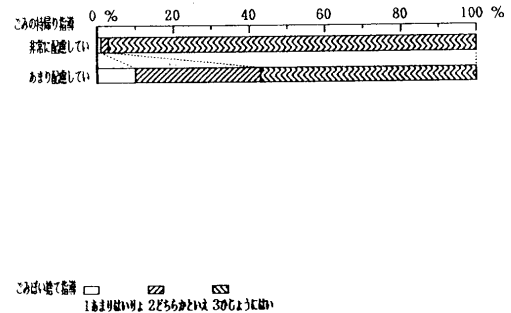


図 8-2 ごみの持ち帰り指導(問25)×
ごみのばい捨て指導(問24)



ている (97.3%) のに対し、ごみの持ち帰りの指導にあまり配慮していないと答えた保護者のうちの約 1 割 (9.9%) は、ごみのばい捨て指導にもあまり配慮していないと答えている。

②子どもが食物をこぼした時や公衆トイレでの手洗い時に使用させるもの

問19で、子どもが食物をこぼした時に台布巾を使う人：ティッシュペーパーを使う人との比は、ほぼ 2 : 1 であった (211人59.3%,

97人27.2%)。

また問20で、公衆トイレで子どもに手を拭かせる時、紙タオルを使わせるよりもハンカチを使わせる方がわずかに多かった (紙タオル130人36.5%, ハンカチ172人48.3%)。

次に、子どもが食物をこぼした時に拭くものと、公衆トイレの使用後に手を拭かせるものとの関係を見る。

図 9-1 より、子どもがこぼした時にティッシュを使う親は、台布巾を使う親に比べ、子

図 9 - 1 食物をこぼした時に拭くもの(問19)×
手洗い後に拭かせるもの(問20)

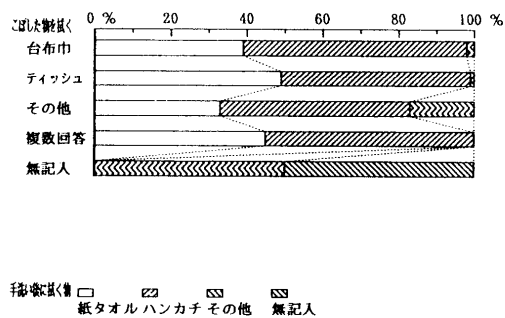
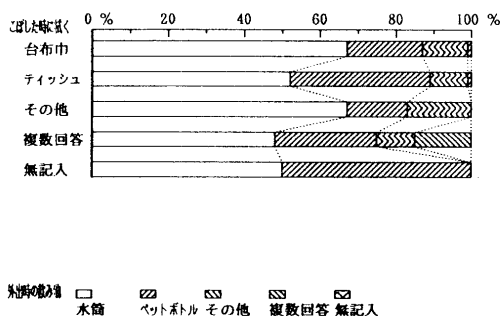


図 9 - 2 食物をこぼした時に拭くもの(問19)×
外出時に持たせる飲み物(問22)



どもに手を拭かせる時に紙タオルを使う率がやや高い (38.9% < 49.5%) と言える。

また図 9 - 2 より、子どもの外出時に水筒を持たせる親が過半数であるが、子どもが食物をこぼした時にティッシュを使う親は、台布巾を使う親に比べ、子どもの外出時に水筒よりもペットボトルを持たせる (19.9% < 37.1%) 親が多い。

4. 保育者の自由記述から

(1) 子どもたちが身近な生活環境に興味や関心をもつような教材として用意している教材 (問34)・用意してある教材 (問35)

いずれも複数回答があり、まぎらわしい設問であったので似通った回答が多かった。両

方を合わせて回答の多い順に挙げると表11のようになる。

記述者は保育者全体 (130名) の 2 割強であった。記述内容は表11に示す通り「視聴覚教材」がもっとも多く、特に紙芝居・絵本類が多く挙げられた。次いで「製作用教材」として空箱やペットボトル等の廃材を再利用したり、「ごっこ遊び用」の家財を保育者が作ったりしている。「植物栽培等」に関する回答

表11 子どもたちが身近な生活環境に関心や興味をもつような教材

教 材 名 (回答数)	
1. 視聴覚教材 (36)	・ 流し台
・ 紙芝居	・ 郵便ごっこ道具
・ 絵本	・ お店ごっこ道具
・ 図鑑	・ お家ごっこ家具
・ かるた	・ 廃材を利用して作ったテーブル・イス等
・ ビデオ	
・ 保健ニュース	
・ エコロジー絵本	4. 植物栽培・飼育 (7)
・ 掛図	・ 花・野菜の栽培
・ 体のしくみパネル	・ 小動物の世話
・ 月刊誌	・ ケナフ栽培
・ パネルシアター	・ 鉢花作り
	・ 発芽観察
2. 製作用教材 (17)	
・ 空容器等の廃材	5. その他
・ 木の実、枝等	・ 市販教材の購入時に使い易さを吟味する
・ 廃材回収箱	・ 環境認識用教材
3. ごっこ遊び用教材 (11)	・ 備品の整備
・ ままごとセット	・ 絵本・製作・ままごとコーナー
	・ 指編みタワシ作り

はほとんどが砺波地区に集中しており、地域的な特色が見られた。

- (2) 環境に関して園で実施していることや考えていること (問38)

表12で示すとおり、「ごみとリサイクル」に関する回答がもっとも多く、廃材の再利用とリサイクル（資源ごみの回収）が多い。

- (3) 園として地域の緑化運動に参加している場合の具体的様子 (問41)

表12 環境に関する園での取組み

取 組 み 名 (回答数)	
1. ごみとリサイクル	B. 資源ごみの分別の 仕方の指導・活動
A. 廃材の再利用(6)	・牛乳パックやダンボー ル等で遊具を作る (2)
・廃材を再利用して製作する	・ごみの分別指導・活動
・カタログ紙を折紙と して再利用する	C. 地域との連携
B. リサイクル活動	(2)
(5)	・親子サークルや園の開放な どで地域との交流をはかる
・アルミ缶・牛乳パック・ ペットボトル等の回収	・親子で資源ごみの分別をする
C. 美化活動(1)	3. 省エネ(節水) (2)
・地域での空缶、ごみ拾い	・量を節約して使う
	・蛇口を閉める
2. 教育・指導	4. 身近な自然との関 わり (1)
A. 物の扱い方・マ ナーの指導(3)	・雑草園を作り、草花や虫に 親しむ
・物を大切に扱うことを教える	
・道具・玩具を大事に扱う ことを教える	5. 水を汚さない配慮
・持ち物や共用物の使い方	(1)
やマナーを知らせ、大切に する気持ちを育てる	・石けんやごみを川へ流 さない

表13で示すとおり、過半数は砺波地区のものであった。砺波地区では「花壇コンクール」が盛んであり、地域の特性が反映された回答となった。

- (4) 空気を汚さないように気をつけていること (問44)

他の自由記述設問に比べて、回答率が高かった（各地域毎の平均回答率24.6%）。多い順に挙げると表14のとおりである。

表13 地域での緑化運動の具体的内容

緑化運動の内容 (回答数)	
1. 花壇作り (10)	4. 花と緑の銀行を利用 (3)
2. 花壇コンクールへの参加 (6)	5. 畑作り (2)
3. 地域の人との連携 (4)	6. 雑草園作り (1)
・地域のお年寄と野菜植え	7. 花と緑の講習会に参加 (1)
・グリーンキーパーと花壇作り	8. 押し花作り (1)
・地域の共同花壇作り	9. クリーン作戦に参加 (1)
・施設のお年寄と球根植え	

表14 空気を汚さないように気をつけていること

空気を汚さないような配慮点 (回答数)	
1. ごみ	3. 省エネ
A. 燃やさない (9)	A. 車の運転時にアイドリングをしない (7)
B. 分別 (6)	B. 注意の喚起 (1)
C. 減量化 (1)	C. 外出時にストーブを消す (1)
D. 出さない工夫 (1)	
E. 購入時に配慮 (1)	D. 省エネに留意 (1)
2. 空気	
A. 換気 (8)	
B. 植物を飾る (5)	

ごみとリサイクルに関する回答としては「分別」して出し「燃やさない」こと、空気を汚さないための配慮としては「換気をこまめにする」と「緑化対策」が挙げられた。また省エネに関する回答としては「アイドリングをしない」が最も多く挙げられた。

IV まとめ

環境教育を幼児期から成人までの生涯教育の一環として位置づけたいと考え、初期の段階にある幼児期にふさわしい環境教育のあり方を模索している。

幼児期の子どもの影響力の大きい保護者と保育者を対象に行なった前回の質問紙調査により、幼児の生活モデルとしての保護者・保育者双方の実態および特徴を明らかにした。

今回はクロス集計と自由記述の整理を基に、次のような若干の知見を得ることができた。

- ①自然との関わりについては、自然に関心の無い保護者は、子どもとの関わりにおいてもあまり配慮していないこと。幼児期に自然への関心の目を開くことは、感性を根づかせる⁵⁾ 基礎とも言える。
- ②食に関しては、保護者自身が旬の食材を味わうことへの関心の有無によって、子どもに教えることに影響しているが、残さず食べさせるしつけには関係が無かった。幼児に旬の食物を教えることに配慮していない保護者は3割に及ぶ。また旬の食物を教えることと、残さず食べるようにしつける保護者は、子どもの年齢に応じて増えていた。
- ③ごみとリサイクルに関しては、ごみの持ち帰りを怠けている保護者は、ごみの分別やばい捨てしない指導についても関心が高いが、逆の場合は、ごみの分別やばい捨てのいずれにもあまり配慮していない。

④食べこぼしを拭くもの、公衆トイレでの手洗い後に拭くものなど、使い捨ての方を選ぶ保護者は、外出時に水筒よりもペットボトルを持たせる傾向が高かった。

⑤保育者による自由記述項目では、子どもたちが身近な生活環境に関心をもつような教材として、紙芝居や絵本などの視聴覚教材を挙げたものが最も多く、次いで空容器等を利用した製作教材であった。

⑥環境に関する園での取り組みとしては、廃材の再利用、リサイクル活動が多い。

⑦緑化運動としては、地域を挙げての取り組みが顕著に見られた。

⑧保育者が空気を汚さないように気をつけていることとしては、ごみに関することが最も多く、換気、省エネの順で挙げられた。

V 今後の課題

昨年からの調査により、保護者は省エネやごみ問題・リサイクル等への関心が高いにもかかわらず、自然との関わりに関しては保育者の回答に比べて顕著に低い結果を示した。幼児期においては、特に自然から学ぶものは大きく、保護者への啓蒙活動の必要性を感じた。そのためには、保育の場で子どもたちが身近な生活環境に興味や関心をもつような教材として、絵本等の視聴覚教材が利用されていることにヒントを得て、家庭に於いても保護者によって同様なテーマで絵本作りを試みてもらうことを提言したいと考えている。

若い世代の保護者には絵心のある人も多いと予想されることと、始めのうちは保護者自身が関心のあるごみやリサイクルをテーマとする作品になるであろうが、やがては自然に関する意識が薄かったということに自ら気づいていってもらえるだろうことを期待するものである。

謝辞

本調査にご協力いただいた幼稚園・保育所の先生方および保護者の皆様、また本稿作成にあたり御校閲いただきました本学小芝隆教授に深謝いたします。

参考文献・資料

- 1) 山極 隆「新教育課程における環境教育」
第2回全国環境学習フェア記念講演資料
1999. 10
 - 2) 「第2回全国環境学習フェア実践発表・研究協議資料」第2回全国環境学習フェア事務局発行 1999. 10
 - 3) ・腰山 豊「幼児の環境教育に関する実践的研究」日本保育学会第52回大会発表論文集 P.422～423 1999. 5
・井頭 均「環境教育のあり方」日本保育学会第52・53回大会発表論文集 P.266～267, 62～63 1999. 5, 2000. 5
・大澤 力「子どもと自然のかかわりについての研究. 1」日本保育学会第53回大会発表論文集 P.58～59 2000. 5
- 他
- 4) 森・石塚「幼児と環境との望ましい関係を求める試み(1)」富山女子短期大学紀要第三十五輯 P.1～11 2000. 3
 - 5) レイチェル・カーソン著, 上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 1996. 7